

信濃教育

授業で勝負

「授業で勝負」これは私が教員になった頃に、先輩の先生に言われた言葉だ。「教科指導と生徒指導は表裏一体」も同義だと思ふ。部活動で成果を上げている先輩には、「授業や学級経営がきちんとできないようでは部活指導はできない」とも言われた。教員の本道とは何かを、先輩は教えてくれていたのだ。

本立もたち而道生みちしやう（本立もたちて道生しやうず）

根本が定まって初めて進むべき道も見えてくる。根本が確立すると、生き方（道）も自ずと分かるという意味の、論語に出てくる言葉である。

また、私たちの先輩である手塚縫蔵は「教育は人なり」と言った。その教員の生き方が、もつと言えは存在そのものが教育だというのだ。教員としての本道が定まることにより、教員の生き方も見えてくる。私たちの先輩は、教員の本道は授業なんだよ、授業を追究し続けるのが教員なんだよと教え、後輩を導いてきたのだ。

自分の授業をみかくためには、研鑽を積むしかない。先輩の先生の授業を見ること、学校内外の先生と悩みを語り合い、実践を検討し合うこと、研修会や研究会に参加し勉強すること、本を読むこと、などなどを信州の多くの教員は行ってきた。日々精進するその魂は、校内研修、各種同好会、教育会の中に今も生きている。すべてはよりよい授業を実現するため。目の前の子どもたちの輝くような笑顔、食い入るような眼差しを見たいからである。それが教員の「本」だからである。

先般、ある若い先生にこんな話を聞いた。先輩の先生に「授業で勝負できる教員になろう」と言われ、この言葉を座右の銘として励んでいるという話だ。今でも、そういう話をしている先輩がいて、それに応えようとする若い先生がいるという事実が、嬉しくもあり、また頼もしくもあった。

信濃教育

巻頭言

一生の宝物

中学三年生の生徒が、小学校一年から三年までの学習を作文にした。その作文には一年生の時からクラスで飼いだめた豚のななちゃんとの暮らしが縷々語られる。出会い、出産、死、出荷など、小さなからだ全体で関わったななちゃんとの思い出は、この生徒の中に中学三年生となった今でも生き続けているのだ。

そして、作文の最後はこのようにまとめられている。

「これから私たちは高校、大学、就職と自分の道を歩んでいきます。でもどこへ行ってもななちゃんに教えてもらったことは生き続けると思います。私がななちゃんに教えてもらったことは、いろいろなことは人生そのものだから。この三年間は私にとって忘れることのできない一生の宝物です。」

小学校低学年の子どもたちは、活動することと思考することは未分離のことが多い。多分この子も、ななちゃんと暮らしている時に、ななちゃんから教えてもらっていることを「人生そのもの」などと意識したとは思えない。ということ、この子の中ではななちゃんとの学びは、その後もずっと続いていようと思える。思考力や認知力が発達するに従って、ななちゃんとの暮らしを、この子は意味づけ、価値づけし、自分の在り方と結びつけてきたのではないだろうか。つまり小学校三年生の時に「感じていた」ことは、その後この子の中で生き続け、中学三年生になってことばとして表出されているように思える。

この活動を子どもたちと共に行った若い先生を私は知っている。それにしても子どもたちと行った学習を、「一生の宝物」と言ってもらえるなんて羨ましい。教師冥利に尽きるだろう。

信濃教育

巻頭言

「出来事」への関心

中学校の教育現場を離れて半年たつ。学校というところは、思いもよらぬ「出来事」の集まりである。人が人を教育する現場であるから、筋書きや計画通りにいかないのは当たり前なのであるが、それにしても毎日が刺激的でならない。そういう日々から離れてみて考えるのは、この「出来事」を私はどのようにとらえていたのだろうか、ということである。

教師のはからい通りにならない事態を、好ましくないものととらえると、思い通りにしたくてたまらなくなる。そして、思い通りにならない事態を引き起こした子どももの有り様を、正すべき課題としてとらえるようになる。しかし、教師の計画からズレることを、「なるほど、そうきたか」と楽しむようになると、子どもたちのありのままが、たまらなく愛おしい。そして、思い通りにならない事態が、子どもたちをより深く、豊かな世界に誘うチャンスであるように思えてくる。

私も長く教壇に立ってきたが、計画通りに進む授業がよい授業だと思っていた時期が長くあった。計画通りに進むのは、子どものとらえが正しいということに他ならないからだ。しかし、いつの頃からか、そのこととは別に、思いもよらぬ「出来事」、それは子どもの意外な発言であったり、行為であったり、トラブルであったり、雰囲気であったり、時には反抗的な言動であったりするのだが、その「出来事」にどう対応するかが自分にとっての関心事となり、課題となった。計画通りに進んだ結果として獲得される力とは別に、教師の「出来事」への向かい方が、子どもたちに生きる力をつける上で重要なことではないか、と考えるようになったからだ。

今にして思うのは、計画通りに進めることにこだわっていた頃の子どもたちに、すまないことをしたのかもしれない、ということである。

信濃教育

巻頭言

郷土愛プロジェクト

上伊那に「郷土愛プロジェクト」という団体がある。若者が都会へと流出し、人口減が進む中、伊那谷の未来を共に創っていくこうと、産・学・官が連携して活動する団体だ。私も五年間一緒に活動をさせていただいた。様々な立場の人がいるので、その思いも様々あるのだが、共通するのは、^ハ熱さ^ダである。ふるさと伊那谷に対する、あふれんばかりの「愛情」である。利害を超え、熱き思いでつながる人たちなのである。

県内では多くの学校で、地域を題材としたふるさと学習が行われている。商店街の活性化、環境の保全、地域おこしの商品開発などなど。ただ、何年かするとその地を離れていく教員と、終生その地で過ごす人たちとの間には意識の差がある。かつては「地域に根を張る」とか「地域に浸り込んで」などと言われてきた。やはり学校教育は地域の実態や課題と密接であるべきだ。大切なことは、教員がその地に生きる人々と語り合い、その思いを感じることだ。学校を出て地域の人たちと関わることは、自分自身の成長にもつながる。できたら、地域の人と一緒に授業づくりをしたい。地域の人にはゲストとしてではなく、共同の授業者となってもらえたら、子どもたちの学びも深まるだろう。

話を郷土愛プロジェクトに戻そう。ここの人たちは、総じてプラス思考だ。伊那谷は課題も多いし、将来への不安もある。しかしそれを逆手にとろうとしている。悲壮感は全くない。楽しくやらなければ、いい仕事はできない。そう教えてくれている。

私は郷土愛プロジェクトの人たちと一緒に活動をさせていただき、多くの熱き人々と友だちになった。私の何よりの財産である。

信濃教育

巻頭言

教え子からの贈り物

定年に際して、かつての教え子たちが贈り物をくれた。近況や思い出をつづったメッセージと、最近の写真で作られたアルバムである。卒業して二十年、どの子（もう子どもではないのだが、ついそう呼んでしまう。職業病だろうか）もそれぞれの人生を歩んでいる。自分の教え子を持つことができたことは、幸せなことだと改めて思う。

ある子が次のように書いてくれた。

「先生はいつも掃除をほめてくれました。今でも職場、私生活共に掃除をすると長くなりません。職場では掃除が丁寧だと言われます。そう言われるたびに先生を思い出しています。」

一生懸命掃除をする子だった。私はいつも感心していた。私がほめたと本人は言っているが、私は感心し、ある種の敬意を持つてことばを発していただけだった。

私のことばは、この子と掃除の関係にどのような影響を及ぼしたのだろうか。私がほめなくても、この子は掃除をしつかりやる子だったろう。いや、ほめられようとして行う掃除だったら、あのような姿となつては表れない。だが、私が感心し、敬意を持つて発したことばは、二十年たった今でもこの子の中に位置づいており、意味を持つているということは言えそう。そして、この子からのメッセージを読むと、私にほめられた掃除は、この子のアイデンティティを形成する上で重要なものとなつたように思う。そんなことがにじみ出てくるメッセージである。

私は、ただただ感心して言っていたのだが、結果からすると、私のことばはこの子の人生の中で生きている。ことばの持つ力を感じずにはいられない。

信濃教育

巻頭言

見えないところの本物

「見えないところが本物にならなければ、見えるところは本物にならない」
私が大きな影響を受けた校長先生がよく口にした言葉だ。

子どもが帰った教室に毎日行き、椅子、机を整頓し、ゴミを拾う先生がいた。放課後の教室など誰も使わないのに。子どもの話を聞いていねいに聞く先生がいた。わがままだと切り捨ててしまふ大人もいるのに。教室に入れない子どもがいる部屋に毎日顔を出し、声をかける先生がいた。自分のクラスの子はいないのに。数値やデータでは表せない、こういう先生たちの良心で学校はできている。

「かんじんなことは目に見えないんだよ」とは、サン・テグジュペリの小説『星の王子さま』で、キツネが王子さまに語る言葉だ。成果や効果、業績評価、などなど、目に見える数値が重視される時代だ。学級や学校にも数値目標が求められる。それはそれで全く意味のないことだとは思わない。しかし、それが全てではない。かんじんなことは目に見えない。何がかんじんなことなのかを考え、見えないところを感じなくてはいけない。

「教育とは流れる水の上に文字を書くような儂いものだ」と森信三は言った。だからこそ、「それを岸壁に刻み込むような真剣さで取り組まなくてはいけない」と言うのだ。見える結果に一喜一憂しては、教育は本物にはならない。

学級も学校も、目には見えないものによって、支えられている。大事なことは、学級担任の先生や校長先生が、そのことを心に刻んで学級経営や学校経営をしているかどうかなのだろう。

信濃教育

巻頭言

ボンタン

校内が騒然となった。K君がボンタンをはいてきたのだ。その異様な服装に先生たちは驚いた。この格好では教室に入れるわけにはいかない、K君は校長室に連れてこられた。

ボンタンをご存知だろうか。大腿部が異様に太く、足首の部分が狭く変形した学生ズボンである。私が教員になった頃、今から四十年くらい前に男子中高生の間で流行した。

K君を前にして、なぜそのズボンをはいてきたのかよりも、どうやって手に入れたのかには興味があった。絶滅したと思っていたボンタンをなぜ持っているのだろうか。まずそれを聞かなければ私が納まらない。他校の生徒から譲り受けたようだ。珍しいズボンを手に入れて、はいてきたかったのだろう。普段から他の生徒とは違う格好をしたいK君である。

K君はとても優しく繊細な子なのだが、強い指導には反発する。また、自分が攻撃されると感じる暴力的になる。言葉でうまく言えないから暴力に訴える。人に手を出してはいけない、暴力を振るってはいけないと、私は何度も注意をし、諭してきた。

しばらくして、K君がまた他校の生徒と喧嘩した。「校長先生は、自分の一番大切なものを守るなら、闘っていいって言ったから」と言う。「何を守ろうとしたんだ」と聞くと「俺は俺のプライドを守ろうとしたんだ。あいつは俺をバカにしたから」と答えた。私の話は聞いているようだし、彼には彼の理屈がある。だが、それでは世の中はやっていけない。まだまだ繰り返し話をしていかなければいけない。

三年の三学期になると学校へあまり来なくなった。高校は行かないという。担任はじめ関係した先生の粘り強い指導が続く。卒業式が迫ってきた。卒業式に出てくれればいいのになあ、と私は祈るような気持ちである。

卒業式に来た。標準のズボンである。髪型も許容範囲。先生たちの指導の結果だろう。卒業証書もらいに段に上がってきた。にわか練習の割にはよくできている。目頭が熱くなる。証書を渡しながら、頑張るんだぞ、と私が言うと、彼は小さくうなずいた。立派な卒業生であった。

信濃教育

巻頭言

地上の星

中島みゆきの「地上の星」という歌をご存知だろうか。NHKテレビ『プロジェクトX』挑戦者たち』の主題歌である。「地上の星」は無名の人々の挑戦と努力、成果を象徴するものである。輝く星は空にあるばかりではなく、地上にもちゃんとある、それを人は忘れてしまい、空ばかり見ている、と中島みゆきは歌う。

伝教大師 最澄は、「一隅を照らすこれ則ち国宝なり」と言った。一隅とは、片すみであり、今いるその場所のことも言える。自分のいるその場所で、できることを精一杯行い、明るく照らすこと、それこそが何物にも代え難く、貴いことなのだ、ということだと私は理解している。

「置かれた場所で咲きなさい」と言ったのは、渡辺和子。九歳の時二・二六事件で陸軍中將の父親渡辺錠太郎が銃弾で命を落とすのをわずか1mの至近距離で見た彼女は、後にカトリックの洗礼を受け、三十六歳という異例の若さでノートルダム清心女子大学の学長になった。

「一隅」も「置かれた場所」も「地上」である。自分に与えられた使命を、全力で果たす、そのことにプライドを持って生きていきたい。そのことが、照らすことであり、咲くことなのである。たぶん多くの人は、そのように考えているのだろうが、様々な現実や不条理を前にして、人は大事なことを見失ってしまうことがある。

さて、半沢直樹である。その視聴率の高さが何かと話題になるドラマであるが、なぜ多くの人がこのドラマを見るか、である。それは、ドラマ中の次のような台詞に秘密がある、と私は思っている。

「あなたは現場の人間をネジだとおっしゃいましたね。確かに一つ一つのネジは小さく非力ですが、間違った力に対しては精一杯命がけで抵抗します」「ネジにもそれぞれ役割がある。巨大旅客機に使用されるネジは二〇〇万個以上です。その一つでも欠ければ飛行機は飛びませぬ。……しがないちっぽけな存在かもしれませんが、与えられた使命を全力で果たします。」中島みゆきも伝教大師も渡辺和子もそして半沢直樹も、皆同じことを言っているように思う。教育現場で子どもたちと向き合い、その子たちのために全精力を尽くす、そんな一人一人の教職員の応援をしてきているのだ。信州教育の神髄もまたそこにある。

信濃教育

巻頭言

卒業証書

何十年も放置してあった倉庫代わりに使っていた古い家をきれいにしようと思い、片付けを始めた。埃をかぶった段ボールやら、使わなくなった家具やら、家電やら、なかなか大変な作業である。いくつかの段ボールは、異動に際し、次の学校で使うかもしれないととっておいた文書等であるが、結局何十年の間、開かれることもなく放置されていた。

「片付ける」を辞書で引くと「ものを納めるべき場所に納める」とあるが、金田一春彦先生、我が家にはその納める場所がないのです。そうすると「片付ける」とは「捨てる」と同じことと同義であると、私の辞書には書かざるをえない。

何十年の間、手つかずに置かれたものだ。いろんな物が出てくる。ほとんどは使わない物なのに、なんでとっておいたのだろうか。わたしはきつと貧乏性なのだろう。

中学生の時にもらった賞状が出てきた。写生大会で入選したものや、陸上大会で入賞したものなどである。懐かしい。見ているうちに、一枚だけ額に入れて飾ろうと考えた。すべて飾ればいいのだが、我が家にそんなスペースはない。どの一枚にしようか、数枚しかない賞状の前に私は悩んだ。どれも思い出が詰まったものだ。悩んだ末、私が選んだのは、中学校の卒業証書である。不思議な話だ。当時私は、卒業証書なんて誰でももらえるものとして、あまり大事に感じなかった。母が仏壇にお供えする意味もわからなかった。

しかし、半世紀を経て、少し変色しシミのある卒業証書、当時軽んじていた卒業証書に直面してみると、私の人生の誇るべき事実として、貴重な物に思えるのだ。「卒業を認める」と印刷された用紙に、私の名前と生年月日が書かれ、校長先生の名前に朱の角印が押された殺風景な証書が、とても重い物に感じる。

暗くなるまで校庭で白球を追いかけたこと、放課後の教室で友と語り、笑ったこと、異性の行動に胸躍らせたこと、その一つ一つが懐かしく、少し切なく、しみじみと思い出される。そんなノスタルジーも、薄汚れた卒業証書は連れてきたのである。